



UNIC Tokyo *Dateline UN*

June/July/August 2011 Vol.76

国際連合広報センター

パン ギムン

潘基文国連事務総長、日本を公式訪問

～東日本大震災で被害を受けた福島へ～



©UN Photo/Evan Schneider

潘基文（パン・ギムン）国連事務総長が2011年8月7日から9日にかけて、日本を公式訪問しました。前回の訪日からちょうど1年ぶり、5度目の訪問となりました。滞在中、潘事務総長は東日本大震災の被災地である福島県を訪れ、被災者の暮らす福島市内の避難所や高校を訪れて励ましのメッセージを伝えると共に、相馬市を訪問して津波による被災の現場を視察しました。

また東京では、菅直人総理大臣、松本剛明外務大臣、北沢俊美防衛大臣をはじめ、鳩山由紀夫前総理大臣、岡田克也民主党幹事長、近衛忠輝国際赤十字赤新月社連名総裁との会談を行いました。

8月7日（日）夕方にニューヨークより成田空港に到着した潘事務総長一行は、そのまま東京駅経由で福島に直行しました。翌8日（月）はまず、高橋千秋外務副大臣の主催する朝食会に出席し、佐藤雄平福島県知事、佐藤憲保福島県議会議長と意見交換を行いました。地震と津波、原子力発電所事故な

*本文中の役職は訪日当時のものです。

INSIDE

潘基文（パン・ギムン）事務総長が
5度目の訪日、福島へ 1-4

国連、パレスチナ難民への取り組み
グランディ事務局長が来日 5

世界を担う未来のリーダーたちへ 6-7

模擬国連世界大会、韓国で開催 7

南スーダン共和国が193カ国目の
国連加盟国に 8

どに見舞われた福島が復興に向けて取り組んでいる様子について説明を受けた事務総長は、「国連は日本政府と日本の人々、特に福島の被災者と共にいるという連帯を示すために福島を訪れた」と述べると共に、「日本人の平静さ、規律をもってすれば、この危機を必ず乗り越えられる」と激励しました。そして、「日本は世界の中でも自然災害への備えが最も優れているが、今回の津波と原発事故の規模は非常に大きく、私たちはこの経験から将来に向けて更に何が必要なのかを学ばなければならない」としました。

今回の福島訪問は事務総長自身の強い要望で実現したものです。被災者と直接触れ合って激励し、国際社会は日本を支援するという気持ちを伝えることを何よりも大切にしたいと考え、訪問するに至りました。

朝食会を終えた潘事務総長一行は、福島市内のあづま総合運動公園に設けられた避難所を訪れました。体育館内に入った潘事務総長と潘敦沢夫人は、仕切りで区切られたブースを一つひとつ訪れ、被災者とひざを突き合わせて言葉を交わし、「国連も世界も皆さんを応援しています」と日本語で激励のメッセージを送りました。これに応えて被災者の方々からも笑みがこぼれるなど、和やかな雰囲気の中での訪問となりました。

次に訪れた福島県立福島南高等学校では、プラスバンド部の演奏と共に総勢100名を超える高校生が事務総長を迎えるました。同校は、福島第一原発が立地する双葉町の県立双葉高校サテライト校でもあり、避難を余儀なくされている双葉高の生徒も事務総長との対話に参加しました。「まずは福島代表の甲子園一回戦突破、おめでとうございます。なでしこジャパンのW杯優勝もおめでとうございます。同じアジア人としてとても嬉しいです」と事務総長が日本語で呼びかけると、緊張した雰囲気が一気に解け、生徒たちからは驚きの声が上がりいました。

そして事務総長は、「今回の東日本大震災で皆さんには大きな影響を受けました。しかし、日本は必ず立ち上ると信じています。皆で力を合わせてがんばってください」と激励しました。続く対話にあたっては「国連事務総長として皆さんのために何ができるのか、国連が皆さんのために何ができるのか是非聞きたい。国連に持ち帰って世界のリーダーたちと話し合いたい」と述べました。事務総長は、福島第一原発の影響を調査するよう国連の諸機関に指示しており、9月にはハイレベル会合を開いて世界のリーダーとこの問題について協議すると述べました。

この後、生徒を代表して福島南高校の尾久千夏さん、双葉高校の渡邊美波さんが英語でスピーチを行い、震災と原発事故の影響によって生活が一変し困難に直面する一方、国内をはじめ海外から多くの支援を受けたことへの感謝を伝えました。続いて行われた質疑応答でも活発なやり取りが行われ、予定時間を大幅に超えて対話が終了し、高校生から記念品として東北の伝統こけしと福島の郷土玩具あかべこが手



JR福島駅で潘基文（パン・ギムン）事務総長一向を出迎える佐藤雄平福島県知事（左から2人目）（8月7日）



福島市内のあづま総合運動公園に設けられた避難所を訪れ、被災者を日本語で励ます潘事務総長夫妻（8月8日）



福島県立福島南高等学校で高校生との対話を実施する潘事務総長。この訪問は、日本ユニセフ協会の協力を得て実施された（8月8日）



東京電力福島第一原子力発電所の事故を受け、国際原子力機関（IAEA）は5月に調査団を日本に派遣し、津波による被害状況を検証した（5月27日）©UN Photo/IAEA/Greg Webb

渡され、事務総長からは国連のピンバッジがプレゼントされました。

高校を後にした事務総長一行は、車でおよそ1時間半をかけ、甚大な津波被害を受けた相馬市原釜・尾浜地区へと向かいました。35度近い猛暑の中、海岸に降り立った事務総長は立谷秀清相馬市長、佐藤清孝新地副町長、相馬市応急仮設住宅組長会および消防団の代表らの出迎えを受けました。事務総長一行は犠牲者を悼む黙とうを捧げた後、市長の案内により、津波で住宅や商店が押し流され建物の土台だけが残る被災現場を視察しました。

その後、事務総長は現場に集まった大勢の取材陣を前にスピーチを行い、「津波による破壊の状況と失われた多くの命を思うと、その悲しみを表現する言葉が浮かばない。同時に、この困難を乗り越えようとする日本政府そして人々の決意、搖るぎない意志、回復力を目の当たりにして非常に勇気づけられた」と述べました。そして、「日本は必ず立ち上がる信じている。国際社会も国連も応援しています」と結びました。

続いて行われた質疑応答で、今後の原子力エネルギーの方向性について問われた事務総長は、「原子力エネルギーの安全利用については世界中で議論が行われている。原子力であれ、水力、火力、あるいは再生エネルギーであれ、それを決めるのは各國政府だ。しかし、福島第一原発の事故は地域的、国家的レベルで協力体制を築くことの重要性を認識する機会となった」と述べました。そして、9月22日に国連で開催予定の原子力の安全に関するハイレベル会合に菅総理が出席することを望んでいると話しました。また、「福島で地元の人々と触れ合って最も印象に残ったことは何か」との質問に対し、「今朝、避難所で被災した方々と言葉を交わした際、『福島第一原発のような事故が世界のどこかで二度と起こることのないように』と、政府と国連に対して真剣に訴える表情が印象的だった。本当に心を動かされる想いだ」と述べました。

福島の被災地訪問を終えた潘事務総長一行は、同日夕に東京に戻り、首相官邸において菅直人総理大臣と会談しました。会談後、記者団に対して事務総長は「糸（きずな）」という言葉を用い、被災した日本の方々と国連をはじめとする国際社会とが強い連帯で結び付いていることを強調しました。「地震、津波、原発事故という三重苦にあえぐ被災地の状況に大きな衝撃を受けたが、日本人の人々の強い意志と立ち直ろうとする搖るぎない決意をじかに見て、日本はこの災害を克服できると確信した」と事務総長は述べました。

また、「特に災害のリスク軽減とその予防、および、原子力の安全基準の強化という面において、日本がこの震災から得た貴重な経験と教訓を国際社会と共に分かち合うという菅総理の言質に大いに励まされた」と語りました。9月22日に開催予定の「原子力の安全に関するハイレベル会合」に日本が積極的に参加することにより、会合を成功に導く



甚大な津波被害を受けた相馬市原釜・尾浜地区（8月8日）



地震と津波の犠牲者に黙とうを捧げる潘事務総長夫妻ら（8月8日、相馬市原釜・尾浜地区）



詰めかけた大勢の報道陣の質問に答える潘事務総長。背後には津波で家屋が押し流され、建物の土台だけが残る被災現場が広がっている（8月8日）



菅直人総理大臣との会談に臨む潘事務総長（8月8日、東京・官邸）

ことができるのではないか、と高い期待を表明しました。

潘事務総長は、注視すべき国際情勢として1,200万人に上る被害者が出ているアフリカの角（ソマリア）の人道状況の深刻さを指摘すると共に、日本政府がすでに行ってきた寛大な支援に加え、追加的支援を検討していることに感謝の意を表しました。また、この7月に独立を果たした南スーダンに対しては、日本政府が陸上自衛隊の施設部隊を派遣することを通して当地で展開する国連平和維持活動（PKO）を支援するよう強い期待を示しました。「ハイチの大地震の際には、日本の自衛隊が現地のPKOに派遣された。自衛隊は主にインフラ整備に貢献し、国際社会に深く感謝されている。今回、アフリカの南スーダンに対して日本からの同様の支援が望まれている」と事務総長は述べました。

同日夕に松本剛明外務大臣との会談、共同記者会見、そして夕食会を行いました。そこでも菅総理との会談同様、東日本大震災から得た教訓を国際社会と共有する重要性、アフリカの角への支援、南スーダンPKOへの参加、そして原子力の安全について活発な意見交換が行われました。その他の国際社会の主要な課題についても広範囲に両者の間で意見が交換されました。その後、鳩山由紀夫前総理大臣との懇談が行われ、事務総長の長い外交の一日が締めくくられました。

訪日最終日となる9日（火）、出発直前までの短い間に北澤俊美防衛大臣、岡田克也民主党幹事長、近衛忠輝国際赤十字連盟総裁との会談を行いました。特に防衛大臣との会談において事務総長は再度、南スーダンに対して陸上自衛隊員の派遣を強く要請しました。その後、事務総長は訪日を終え、羽田空港から次の訪問地となる韓国に向けて離日しました。

今回の訪日は、6月に潘氏が事務総長として2期目を確実にした直後に実施されたもので、再任にあたって日本政府の強い支持を得たことに感謝を示しました。こうした中、潘事務総長が国連そして国際社会を代表する形で被災地福島県を訪問したことは大きな意義があるといえます。

特に、福島県知事、相馬市長、高校生や避難している被災者の方々との交流を通して、震災の被害が深刻であるにも関わらず、復興に向けて前進する人々の熱い思いを事務総長は共有することができました。また、東京では政府要人との会談において、日本政府の復興への固い決意に心を動かされたと事務総長は述べています。

国連は、災害のリスク軽減とその予防、および原子力の安全基準の強化という面で、日本が東日本大震災で得た経験と知見を国際社会と共有する上で貢献できると考えています。

訪日の模様はウェブサイト <http://www.unic.or.jp> のトップページから
YouTubeアイコンをクリックしてご覧ください。



松本剛明外務大臣と会談を行い、記者会見に臨む潘事務総長（8月8日、東京・飯倉公館）



北澤俊美防衛大臣と会談を行う潘事務総長（8月9日、東京・防衛省）



岡田克也民主党幹事長と会談する潘事務総長（8月9日、東京・帝国ホテル内）



近衛忠輝国際赤十字赤新月社連名総裁と会談する潘事務総長（8月9日、東京・帝国ホテル内）

UNRWA 事務局長、パレスチナ難民への支援を訴え

国連にはパレスチナ難民に対する支援を60年以上行っている機関があることをご存知ですか？国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）と言い、1948年のアラブ・イスラエル紛争の直後に発生したパレスチナ難民に対する直接的な救済を行うために国連総会によって設立された機関です。

支援の対象は、中東のヨルダン、レバノン、シリア、ガザ地区、および東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区の5カ所に住む約500万人のパレスチナ難民。現在も140万人余りが、同地域に点在する58の難民キャンプで暮らしています。UNRWAは恒久的な財政難にありながらも、教育、医療、インフラと難民キャンプの改善、小規模融資、武力衝突や暴力行為により被害を受けた難民への緊急支援など、様々な人間開発や人道支援を続けています。

8月末、そのUNRWA事務局長であるフィリッポ・グランディ氏が訪日しました。訪日の目的は、UNRWAと日本との連携をさらに深めることによって日本からの支援を強化し、パレスチナ難民支援を担う国連機関への理解を得ることでした。

グランディ事務局長は外務大臣をはじめ日本政府関係者と積極的に協議を重ねました。また、近年連携を深めている国際協力機構（JICA）等が主催するシンポジウム「激変する中東情勢とパレスチナ難民～UNRWAと日本の役割」で講演を行い、JICA、外務省、財団法人中東調査会の代表および中東の専門家と活発な意見交換を行いました。また多くのメディア・インタビューを受け、最終日には日本外国特派員協会（FCCJ）で緒方貞子JICA理事長と共に記者会見を行いました。

訪日中、様々な機会にグランディ事務局長が訴えたポイントは、以下のようにまとめることができます。

1) 「アラブの春」がパレスチナ難民に与える影響

アラブ世界に広がる民主化要求運動に触発され、パレスチナ難民が自分たちの要求をもっと主張できる環境が



パレスチナ難民への教育を担うのも
UNRWAの大切な役割（9月5日、ガザ）©UN Photo/Shareef Sarhan

整ってきている（“License to speak out”）。難民帰還を含むパレスチナ問題の最終的な解決、パレスチナの人々の中での民主化の推進、和平プロセス全般における自分たちの直接的な参加などについてより主体的に考え、他のアラブ諸国の若者のように要求を声高に訴えていくことが大切だと感じているようだ。例えばガザでは雇用の機会が限られ、若者の失業率が非常に高いことから、「アラブの春」に影響されたパレスチナの人々の不満が一挙に噴出する可能性も否めず、この地域の不安定さが増す恐れがある。

2) 求められる政治レベルでの解決

パレスチナ難民問題の解決は政治レベルで行われなければならない。イスラエルとパレスチナの和平交渉は現在停滞しているが、国際社会も当事者もこれ以上の紛争を望んでいないことは自明だ。国際的に重大な政治問題に対して、国際社会は強いコミットメントを持って和平プロセスを前進させていくことが求められる。

3) 日本へのメッセージ

日本政府に対し温かい支援を感謝すると共に、東日本大震災により深刻な被害を受けた日本の方々に対し、パレスチナの人々との絆を示したい。UNRWAの運営資金の大半が日本のような主要拠出国からの任意の拠出金で賄われているが、今年もまだ5,000万ドルが不足している状況だ。UNRWAへの拠出順位で、日本は2009年の14位から昨年は7位になっている。国内の財政難にも関わらず支援を増やしていただいたことに心から感謝したい。

JICAとの連携もこれまで以上に強化され、訪日に合わせてUNRWA-JICA間で包括的な協力協定を結ぶことができた。新しい枠組みの下、レバノンのサイダ市にあるアイン・ヘルワ難民キャンプの上下水道改善事業をJICAとUNRWAが実施することになった。政治レベルでパレスチナ問題の解決を推し進めると同時に、パレスチナ難民が人間としての尊厳をもって生活できるよう、日本政府と日本の方々に今後も引き続き、UNRWAとパレスチナ難民に対する支援をお願いしたい。

世界を担う未来のリーダーたちへ



「対話と相互理解」をテーマに、平和、人権の尊重、そして世代や文化、宗教、文明を超えた連帯という理念を推進するため、国連は2010年8月12日から2011年8月11日の一年間を「国際ユース年」と定めました。この間、より自由で公正な社会を求める「アラブの春」が、北アフリカおよび中東へと広がりましたが、こうした動きの中心となって変革を求めたのは若者たちです。7月25日に開催された「ユースに関する国連総会ハイレベル会合」で、潘基文（パン・ギム）事務総長は各国政府に対し、「若者への投資を怠ることは何の節約にもならない」と述べ、意思決定のプロセスに若者を関与させようと呼びかけました。

きょう、皆様と共に「国際ユース年」を締めくくれることを嬉しく思います。この場に駆けつけた大勢の若者の皆さんを心から歓迎します。

皆さんの活力は常に私を奮い立たせてくれます。また、皆様のスタイルのセンスにも学ぶところが大きいです。（ファッショントレンドの）ウェックさん【写真②】、あなたはそのスタイルを象徴する存在です。しかしそれ以上に、また一つ生まれるかもしれない悲劇が食い止められたという希望を象徴する存在でもあります。

私は今月、ウェックさんの生まれ故郷であり、国連の最も新しい加盟国でもある南スーダンの独立記念式典に出席するという、大きな喜びに恵まれました。この193番目の国連加盟国が、その望み通りに平和と繁栄を実現できるよう、それぞれのやり方で、共に努力していきましょう。南スーダンには国際社会からの全面的な支援が必要です。そして、この国の若者には中心的な役割を担う能力と義務があります。

ダンタスさん【写真⑤】、私は過去2年間、2度にわたってダンタスさんの故国ブラジルを訪問しました。

私はリオデジャネイロのバビロニア・スラムに暮らす若者に会い、他のスラム出身の若者も交えて話をしました。ダンタスのように暴力と薬物を逃

れて教育を受け、仕事を見つけられた若者たちばかりではありませんでした。私は彼らに会い、今日の**世界に生きる10億人以上の若者たち**に想いを馳せました。その大多数は開発途上国に暮らしています。

その中には、よい教育を受け、人間らしい仕事や実りある人生を期待できる若者もいます。しかし、教育も自由も、当然の機会も認められていない若者があまりにも多くいます。**若者の失業率は成人の3~6倍**に上り、しかも**非正規で低賃金、不安定な雇用が常態化**しています。特に女性、障害者、そして先住民の若者に顕著です。

年長者や政府に対して「自分たちが欲しいのはこんな世界ではない」と明言する若者たちも徐々に増えています。このような確信を持つに至ったことは、この一年間が若者にとって極めて重大な年となったことの一つの成果といえるでしょう。

「国際ユース年」の総会決議の提案国でもあった**チュニジア**では、若者たちが中心となって**変革を求める動き**を推し進め、これが北アフリカや中東全体に波及しました。

昨年12月に焼身自殺したチュニジア人の露天商人、モハメッド・ブアジジさんについては、皆さんもご存知でしょう。彼は27歳の若さで、尊厳のな

いぎりぎりの生活に疲れ果て、不満を募らせていたのです。彼は自分自身にも、そして同胞にも、将来などないことを悟り、自らを犠牲にしました。

ブアジジさんは悲惨な死を遂げましたが、彼が灯した炎は、まずチュニジア、そしてエジプトという2つの国々で、支配者を政権から退けました。それ以後、この炎ははるか遠くまで運ばれています。

フェイスブック世代は、私たちの世界を変えるという決意の広がりだけでなく、これを実際に引き起こせる能力も示しています。こうした若者は、その活力と勇気を持ち寄り、私たちが直面する最も困難な課題のいくつかを克服しようとしているのです。

若者たちは**性別や人種、性的志向による差別に苦しむ人々の権利**を守るために立ち上がっています。同じ若者に語りかけ、HIVやエイズのまん延を止めようとするなど、タブー視されてきた問題に立ち向かう若者もいます。

さらに、**環境に優しい開発モデルの採用**を迫る運動を先頭に立って進める姿も見られます。共通の目標を達成するために、**宗教的、文化的な違いを乗り越えられること**、また、そうしなければならないことを、年長者よりもよく理解している若者が多くいます。



【写真】①チュニジアを訪れた事務総長は、民主化を求める運動で中心的役割を果たした若者世代と意見交換を行った（2011年3月）②国際ユース年を締めくくるハイレベル会合で演説するスーダン出身のモデル、アレック・ウェックさん。スーダンの現状や世界各地の難民の窮状に関心を集める活動を展開（2011年7月）③「対話と相互理解」をテーマにした「国際ユース年」のオープニング会合から（2010年8月）④「ユース・チャンピオン」を務めた米国人女優モニーク・コールマンさんは世界各地で若者と交流 ⑤ブラジル出身のロムロ・ダンタスさんはユース団体の国際フォーラムを代表して演説した（2011年7月）©UN/DPI Photo

国連総会に集う各国代表の皆様、私たちの仕事は、若者が自分たちの望む世界—すなわち、**国連憲章に謳われた対話と相互理解に基づく世界**—を受け継げるよう、若者たちのために、そして若者たちと共に努力することです。国際社会は、若い男女が得られる機会の幅を広げ、**尊厳とディーセント・ワーク**という当然の要求を満たすよう努めなければなりません。

グローバル経済の危機と、多くの国で導入されている**緊縮措置**の結果、こうした機会は縮小しています。機会を失った若者は、**犯罪や薬物、危険な性行為**に走りやすく、社会の最底辺への道を転げ落ちていくことになります。

若者たちへの投資を怠ることは、何の節約にもなりません。逆に、若者に投資すれば、すべての人々に多大な配当が支払われることになるでしょう。国連は若者への投資に大きく貢献しています。現代の若者に影響する問題に関する知識や実践も蓄積しています。また、私たちの交渉や意思決定のプロセスに若者を関与させようとする取り組

みも進めています。

それでも、十分なことができているとは到底思えません。皆さんのために、私たちは十分なことをしているでしょうか。私たちは若者のために、もっと多くのことができ、また、そうしなければならないと思います。彼らは**明日のリーダー**です。皆様も、そして私も、今日のリーダーであるかもしれません。しかし将来、ここに立ち、世界をリードしていくのは彼らなのです。

国連は来年6月、国連史上で最も重要な会議の一つをリオデジャネイロで開催します。この「**国連持続可能な開発会議（リオ+20）**」は、私たち全体の未来を決定づける一つのきっかけとなるものです。私にとって、その優先度が高い理由もそこあります。

若者たちには、リオ+20のプロセスに生き生きとした新しい考え方や斬新な視点、活力を吹き込む上で中心的な役割を担う能力と義務があります。若者たちの関与を深め、その発言権を確保するよう私たち全員が努めるべきです。

第3回模擬国連世界大会が開催されました！

世界を担う未来のリーダーとなる若者たちが集まり、地球規模の問題について話し合い、解決策を探る活動—模擬国連。その第3回世界大会が8月10-14日、韓国・仁川で開催され、53カ国の国連加盟国から約600人の学生が参加しました（日本からはおよそ40人）。

今回の模擬国連のテーマは「持続可能な開発：自然との調和を保しながら人類が発展するには」。このほか、国連が直面している幅広い問題について、学生たちは深夜に及ぶまで議論を交わしました。

参加した学生たちに、将来、外交官、国連職員、また国際的な専門家やリーダーになりたい、という意欲を高めてもらうことも、模擬国連の目的です。実際、数十年後には、この模擬国連に参加した学生の皆さんの中から、国連事務総長が誕生するかもしれません。

南スーザン共和国、193番目の国連加盟国に



©UN Photo/Mark Garten

国連総会は2011年7月14日、スーザンから分離・独立した南スーザン共和国の国連加盟を全会一致で承認しました。2006年のモンテネグロ共和国以来となる新規加盟で、南スーザンは193番目の加盟国となりました。「南スーザン、国際社会へようこそ」。潘基文（パン・ギムン）事務総長の挨拶を紹介します。

*“Welcome, South Sudan.
Welcome to the community
of the nations.”*



©UN Photo/Evan Schneider

世界は今、ここに集い、声を合わせてこう言います。「南スーザン、国際社会へようこそ」

ほんの数日前、私は首都ジュバの独立記念式典に出席しました（7月9日）。私がそこで感じたのは、世界で最も新しい国の活力、潜在能力、そして人々の心からの喜びでした。

私の目には、掲揚される国旗が南スーザン国民の希望の高まりを象徴するかのように見えました。それは長い内戦に耐え、多くのかけがえのない人を失い、家や故郷からの避難を余儀なくされながらも、決して希望を捨てなかつた人々の姿でした。そして今、スーザンの人々は重要な節目を迎えました。しかし、希望への旅はまだ続きます。

今後、大きな課題が待ち受けていることは確かです。しかし、南スーザンには大きな潜在能力もあります。豊富な天然資源や耕作地、ナイル河の水、そして何よりも、誇り高く勤勉な国民に恵まれているからです。

私たちは、地域的な成果の定着を支援しつつ、南スーザンの未来の構築を援助していくことを誓います。私たちは共に、南北スーザンの指導者に敬意を表します。両国の指導者は、勇気と決意を持って住民投票を成功させ、人々の民主的な意思表示を可能にしたからです。

国境、資源の共有、移住の問題については、できるだけ早く取り組むべきです。そのためには、皆様がこれまで示してきた現実主義とリーダーシップを再び発揮し、残る争点を解決し

ていくことが欠かせません。それぞれの安寧と将来の繁栄は、お互いにかかっているからです。南北スーザンは運命共同体といえます。競争相手ではなく、真のパートナーとして将来を考えなければならないのです。

国連、アフリカ連合（AU）、国際NGO、そして各加盟国は、強力かつ密接な支持者として、南北スーザンによる和平、開発、そして人権の実現に向けた取り組みを支援してきました。

さらに先へと進むためには、私たちの変わらぬ決意が欠かせません。平和、正義、すべての人にとっての機会という理念を、共に忠実に守っていこうではありませんか。そして最も新しい加盟国の国民に、こう伝えようではありませんか。「国際社会に仲間として受け入れ、支援します」と。



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 国連大学本部ビル 8階

TEL: 03-5467-4451 FAX: 03-5467-4455

URL: <http://www.unic.or.jp> / E-mail: unic.tokyo@unic.org